

コスモスプロジェクト

虫^{むし}を^を探^{さが}そう！



ガイドブック

2026

小美玉市生涯学習センター コスモスプロジェクト

『虫を探そう!』へ ようこそ!

虫に目を向けてみると、小美玉市がこんなに豊かな自然に恵まれてるなんて!と驚かれると思います!ここでは、虫探しのポイントや注意点などを記載しています。
ぜひ、いろんな虫を探してみましよう!

目次

- 虫探しのヒント・・・・・・・・・・・・・・・・P.2
- おすすめの市内公園等・・・・・・・・P.4
- イベント用（同定のため）の撮影の仕方・・・・・・・・P.5
- 種類の調べ方・・・・・・・・P.6
- フィールド危険ガイド・・・・・・・・P.7
- その他の注意・・・・・・・・P.10
- 希少種・外来種・普通種について・・・・・・・・P.11

虫さがしのヒント

虫を探すなら、野原や雑木林などと思い込んでいませんか？
もちろんそれも間違いではないですが、他にもこんな探し方があります！

◆ 灯火

光に集まる習性をもつ虫は多く、とくに夜行性の虫は、明かりに寄ってくる種がたくさんいます。近年では、虫の好む蛍光灯に代わって LED ライトが一般的となり、お店などの明かりに集まる虫は少なくなっていますが、それでも、光に引き寄せられて来る虫は見つかります。

暗くなってから外出する機会があれば、明かりの下でちょっと足を止めてみましょう。外灯が蛍光灯のおうちでは、夜に少し玄関先などを探してみると、面白いものが見つかるかもしれません。ガ、カミキリムシ、ゲンゴロウ、カメムシ、ウスバカゲロウ、カマキリモドキやヘビトンボなどは、灯火採集で見つかりやすいです。2020年に小美玉市で県内では57年ぶりに見つかったマエアカヒトリや、市内で過去たった1件のタガメの記録も、灯火採集によるものです。

◆ 地面

花や草、樹木だけでなく地面にも多くの虫がいます。地面を徘徊して暮らしているハンミョウやゴミムシのような虫も少なからずいますし、オサムシのような飛べない虫も意外と多いです。そして、多くの虫の幼虫やサナギが地面や地中を住処にしています。

アリジゴクという幼虫の呼び名でおなじみのウスバカゲロウの仲間は、多くが地面に産卵します。また、ニッポンハナダカバチは、主に河川敷や湖畔などの砂地に巣を作って子育てをします。砂地を掘って穴を開けたり、巣穴から出てきてその穴を埋めて隠したり、獲物を抱えてその巣に帰ってきたりするハチを見つけたら、この種である可能性が高いです。

夜に町の灯火に寄ってきてそのまま帰りそびれた虫が、朝、アスファルトやコンクリートの地面に残っていることもあります。珍しい虫の死骸を見つけられることもありますので、通勤通学などの途中でも、何か見つかるかもしれません。

◆ 公園や舗道の手すりや柵

緑地の中では、植物だけでなく、人の目の届きやすい手すりや柵でも、たくさんの虫が見つかります。珍しい虫が見つかることは少ないかもしれませんが、まずは身近な種を見慣れて覚えていきたい初心者にはピッタリの観察場所です。

◆ 庭木・街路樹

おうちの周りや街中の植物をみると、思いがけず注目の虫が見つかることもあります。

近年、従来は日本にいなかったはずの外来カミキリムシが、全国各地で問題になってきています。クビアカツヤカミキリの幼虫は、私たちの身近にあるサクラ・ウメ・モモなどバラ科の木を食べ、ツヤハダゴマダラカミキリの幼虫は、カツラ・トチノキ・ニレ・カエデ・ヤナギなど、街中や道路際などでも見られる木を広範にわたって食べます。

カミキリムシに限らず、虫の食べる植物を知り、まずその植物を探すのは、虫を探すのにとても良い方法です。例えばチョウの仲間であれば、アサギマダラの幼虫ならキジョラン、オオムラサキの幼虫ならエノキ、ミドリシジミの幼虫ならハンノキです。これらの成虫が産卵のために訪れているのを、見られることがあります。

ふだんの生活の中でも、木の近くを通りがかる際には、何かいないか、フラスなどの食痕がないか、確認してみましょう。

おすすめの市内公園等

家族で遊びに行こう！というときにオススメのスポットをいくつかご紹介します！

◆ 権現山古墳《玉里地区》

生涯学習センター コスモスの施設・民家園の裏山にあたる場所です。民家園の駐車場から舗道を入った左手に古墳があります。古墳周辺は折々に草刈りされており、周囲は雑木林で、霞ヶ浦を臨む森林と草地の豊かな自然環境になっています。この近くでは、トゲナナフシが見つかっており、周辺では、サシバやオオタカの営巣がたびたび確認されています。市内唯一のアカマダラハナムグリの記録もこの近くです。

◆ やすらぎの里《小川地区》

丘側は下草の刈られた手入れの良い雑木林が広がり、低地へ下ると刈り込まれた湿地草原と水田、脇には水路、さらに庭園池があります。森林・草地・水場が揃った環境で、多様な虫が見られます。エノキが植わっており、運が良ければオオムラサキやタマムシにも会えます。また、ニッポンハナダカバチの記録もこの場所です。

◆ 茨城空港公園～北山池緑地広場《小川地区》

茨城空港調整池の周辺は、芝生の緑地帯となっており、北山池との間には雑木林が残されています。周辺は舗道もよく整備されていて、ウォーキングや犬の散歩などで訪れる方も多い場所です。とくにトンボが多く見られ、キイトンボに遭遇したことがあります。

◆ 四季の里《美野里地区》

四季健康館の外側から奥にかけて水路を整備した遊歩道があり、水生昆虫も見ることができ、シマゲンゴロウを発見したこともあります。両館の中央部は広く芝生の広場になっており、その奥には木々を背に池や湿地もあります。奥の草地にはウマノスズクサも生え、ジャコウアゲハが見られます。近年、条件の良い年には、グランドゴルフ場方面でキバネツノトンボも見られます。

◆ 先後公園《美野里地区》

隣接する八幡池は、今ではほとんど干上がった状態ですが、16年ほど前までは薄く水が張っていた部分も広くあり、湿地性の貴重な植物や虫など生物の宝庫でした。かつて生息していたハッチョウトンボは、この16年ほどは見られていません。しかし今もまだ細々と残っている種もいます。また、周辺は大きく雑木林が囲っており、森林性の虫たちも多数発見されます。シンジュサヤムラサキシャチホコなど多彩なガの生息も数多く確認されています。

ここでしか見つかっていない珍しい種も多く見つかっており、大変貴重な環境と言えます。

イベント用（同定のため）の撮影の仕方

自然の中で虫に近づいて写真を撮るのは難しいです。とくに俊敏なチョウやトンボなど撮影するときは、捕獲してから指でつまんで、同定ポイントが良く見える角度で撮影すると良いです。

虫を掴むときは、毒がないか確認し、噛まれたり刺されたりしないように気をつけてください。

写真は、**同定のために必要な部位が確認できるもの**でなければなりません。確認するための撮影ポイントは、種ごとに異なります。ここでは、それぞれの主な撮影ポイントを具体的にお伝えします。詳しくは、種名をネットで検索して、特徴を調べてみましょう。見分けのための撮影ポイントがわかるはずです。

同定には大きさも参考になるので、撮影したら、おおよその大きさをメモしましょう。

※同定とは、ある対象が「何であるか」を特定・識別し、その正体や名前を判定すること。

○トンボ目

翅を広げて止まる種は背面より、側面の写真が同定しやすいです。素早く逃げてしまいがちなので、捕まえてから撮影した方が画像を残せる可能性は高いです。噛まれないように気をつけて翅を揃えて持ち、横から撮影しましょう。

複眼の付き方にも科ごとの特徴があるので、頭部を正面から撮るのもオススメです。

○カマキリ目

特徴がわかりやすい部分として、カマやその付け根の内側が挙げられます。ウスバカマキリはカマの付け根、コカマキリはカマ先の方に、特徴的な斑紋があります。見分けの難しいハラビロカマキリとムネアカハラビロカマキリは、カマ上部のイボイボの付き方が違います。それぞれのカマの内側の特徴がわかりやすいように撮影しましょう。また、ムネアカは名前のとおり胸が赤いので、できれば胸部が写るように撮影をお願いします。

○バツ目

真横は難しいかもしれませんが、なるべく横からも撮影してください。

○アミメカゲロウ目

ツノトンボやウスバカゲロウは、背面からの写真で大丈夫ですが、ケカゲロウやカマキリモドキは、なるべく横から撮影してください。

マダラウスバカゲロウは翅の模様が同定のポイントになりますので、翅がはっきり写るように撮影をお願いします。

○チョウ目

ムラサキシジミやミドリシジミは開翅の写真がわかりやすいですが、翅を閉じた横からの画像でも大丈夫です。ギンイチモンジセセリは、横からの写真がわかりやすいです。ジャコウアゲハは、翅も特徴的ですが、胴体の見える横からの画像も同定しやすいです。

基本的には、どの種も、開翅の写真・翅を閉じた横からの写真どちらでも、大丈夫です。

○その他の目

リストに上がっている種は、背面からの画像で、全身が写っていれば、まず同定できます。

種類の調べ方

ネットの時代になり、調べごとは格段に手軽になりましたが、必ずしも正しいものばかりではないため、いくつかのサイトで調べて答え合わせをすることが必要です。その上で、本や文献等の確かな情報と照らし合わせることで、さらに正答の可能性が上がります。

ここでは、ネット検索による簡易な同定の手順をご紹介します。

見つけた虫の種名が思い当たる場合には、その種名で検索し、画像や掲載されている情報で、間違いないか確認します。いくつかの情報を見て判断しましょう。

種名がわからなくても、何の仲間か（チョウ目ヤガ科 など）がわかれば、まず目名や科名を検索してみましょう。目名や科名とともに、特徴を、キーワードとして一緒に検索してみるのも、おすすめる方法です。例えば、「ハムシ 大きい 丸い オレンジ」（これはオオアカマルノミハムシを見つけた時の検索ワードです）といったように、キーワードをスペースで区切って並べ、検索します。一発で出てこなかった場合にも、特徴の近い種が出てくれば、それと同じ科の仲間などを探していると見つかることがあります。

まったく何だかわからない場合には、画像検索アプリ（無料のものもあります）を利用する方法もあります。利用するにはまず、アプリをインストールします。アプリを起動し、検索ウィンドウのカメラのマークをタップすると、写真の撮影ができるようになるので、起動したカメラで対象の虫を撮影するか、アルバムから撮影した画像を選択すると、その画像に近いネット上の画像を提示してくれます。一致まではしなくても、似た種を拾って見せてもらえれば、それを手掛かりにまたキーワードによるネット検索ができ、見つけ出せることがあります。

昆虫の名前を調べる際には、ネット上の図鑑のような便利なHPサイトもいくつかありますので、探してみてください。さまざまな関連情報も楽しめます。

どうしてもわからない場合は、当イベント LINE 公式アカウントでの簡易診断をご利用ください。

LINE のチャット機能を利用した簡易診断を承ります。

チャット機能とは、公式アカウントのトーク画面上にて、運営担当と友だち登録されたメンバー様の間のみで、個別のやりとりができる機能です。メンバー様側からいただく返信は、**運営担当にのみ**届きます。また、それに対する運営からの返信も、他のメンバーのトーク画面には出ません。同じトーク画面内に、全体向けのメッセージと同様に会話が並びますが、個別の会話の部分は、他の利用者のトーク画面には反映されませんので、ご安心ください。

簡易診断は、まず LINE 公式アカウントを、友だちに追加してください。そして、そのトーク画面に写真を UP して、続けて「簡易診断希望」とメッセージしてください。氏名等個人情報の報告は不要です。スタッフが LINE メッセージを確認次第、チャット返信にて回答いたします。

フィールド危険ガイド

フィールドによっては、足場の悪いところがあります。ぬかるんだ地面や石などが濡れてすべりやすくなっていたり、水たまりや側溝が草に埋もれていたりとするため、足元に注意し、ケガのないように移動してください。

また、水の近くは要注意です。ため池などは大変危険ですので、けっして入ってはいけません。

そして、自然の中の生き物には、咬んだり刺したりして人に被害を及ぼす種がいます。中には、非常に危険な毒や病原体を持つものもいるため、十分に気をつけるとともに、いざという時には適切な対処ができるよう備えておきましょう。

以下、自然の中で注意が必要な、人に被害を及ぼす主な生物をご紹介します。

詳しくは、それぞれの種名でネット検索をするなどして、ぜひ調べてみてください。

刺されると怖い虫には、**ハチ、ブユ、マダニ、サシガメ（肉食のカメムシの仲間）**などがあります。意外かもしれませんが**マツモムシ**など水生昆虫にも刺すものがいて、刺されるととても痛いです。**ハチや、ブユ・カ**などは、**毒も**持っています。

スズメバチは、アナフィラキシーを起こすと命に関わります。春のうちはおとなしいですが、秋の次期（女王養育期）になるにつれ攻撃的になります。スズメバチは基本的に子どもを守るため、もしくは自分の身を守るために刺すので、こちらから手を出したり巣に近づいたりしない限りは襲ってきません。夏～秋に林に入る際などは、**明るい色の服装がオススメ**です。

カヤブユ、ヌカカなどは、**痒みが厄介**です。刺された時には痛みもなく気づきにくいのですが、しばらくすると激しい痒みに襲われ、とくにブユやヌカカは炎症が強く長引きます。

特に危険なのが、**マダニやツツガムシ**など、**噛むついでに病原体を媒介する虫**で、これらは命に関わることがあります。**刺された時に痛みなどが無い**ため、刺されているのに気づいたら、自分で取ろうとせず、**なるべく早く皮膚科の病院に行く**のがオススメです。草むらや藪に入る際は、**肌を露出しない服装**で対策してください。白っぽい衣服であれば、早めに気づきやすいです。足元は長靴がオススメです。

また、ドクガなど一部のガの仲間の幼虫には、体表に毒針毛が生えており、針だけが衣服や布団などに付いて残っていることもあります。針に触るとひどくかぶれ、痛みや痒みが生じます。

また、**噛まれると痛い虫**はたくさんいます。代表的な噛む虫は、カマキリやアリ、クモ、ムカデで、トンボやツノトンボも噛みます。これらの中では、**クモやムカデが、毒を持つ虫**です。

虫以外に気をつけなくてはならないのが、ヘビです。特にマムシは、危険を感じた際は、逃げずにじっと潜む習性のため、気づかずに踏んでしまうことがあります。ヤマカガシ、アオダイショウやシマヘビなども出会いがちなヘビで、咬傷事故の可能性があります。

このうち、オレンジ色の斑紋が目立つ個体の多いヤマカガシは、奥歯に毒牙があります。

奥歯までガッツリ咬まれることは滅多にありませんが、比較的気性が荒い個体もいるので、近づかないように気をつけましょう。

他にも、サル、イノシシ、クマといった人を襲う可能性のある動物の目撃情報も増えてきており、野犬に出会うこともあります。見かけた際には決して近づかず、目を合わせず、背を向けず、なるべく静かにその場を離れるようにしましょう。

以上の中でも特に注意が必要なものを、もう少し詳しくご紹介します。

▼ マダニ

ダニの仲間。マダニは元々の大きさが2mm前後あるため、肉眼でも姿かたちを確認できる。

自然豊かな草むらに潜んでいて、近くを通りかかる獣に乗り移り、皮膚に口器を刺し込み吸血する。時間をかけて吸血するため、1～2週間ほど獲物の体に吸い付いたままの状態で、吸血が進むに従い徐々に膨らんでいく。満腹になる頃には直径1cmほどにもなり、獲物の体に赤黒色の豆がくっ付いているような見た目になる。

刺されても痛みや痒み腫れなどがほとんどないため、吸血で大きく膨らんでから、異変に気づくことが多い。公園などで散歩している犬や野良猫が被害に遭うこともあり、犬や猫には、耳の周辺によく付いている。

吸血の際に、さまざまな病原体を媒介することがあり、中には重篤化する致死性の高い病もある。衣服で肌を覆い、草むらで立ち止まったり、座ったりしないように気をつけ、休憩時や活動後には付かれていないか確認したり衣類表面を払ったりすると良い。白っぽい衣服や長靴だと、刺される前を見つけやすい。

刺された場合、引っ掻いたり手で取ろうとしたりすると、刺さった口器や頭部がもげて皮膚の中に残ることが多く、その場合皮膚を切開して取り出してもらう必要がある。また、むやみに触ると、マダニの体を押し、病原体を注入してしまうこともあるので、自分で処理しようとせず、なるべく早く皮膚科の専門医を受診するのが最善の対処法である。

刺された自覚や可能性がある場合には、念のため医療機関を受診し処方をしてもらうのが良い。そして、フィールド活動後、皮膚に紅斑が出たり発熱や体調不良の異変があったりする場合は、早急に医療機関で医師にその旨を伝え診察を受ける必要がある。

▼ ツツガムシ

マダニと同様、ダニの仲間。屋外の自然豊かな山間部や河川敷などの地際に生息していて、幼虫の時期に、近くを通りがかった獣に乗り移り、口器を皮膚に刺し入れて体液を吸う。こちらは獣に付くときの大きさがようやく肉眼で確認できる程度、1mmに満たないサイズで、薄いオレンジ色、少し細長い楕円型の粒に見える。

マダニほど体は膨れないが、数日程度体にひつつき、主に初夏や秋の時期に被害が出る。

体液を吸う際に病原体を媒介することもマダニと同様で、対処方法も同じである。

ツツガムシも、咬まれた時には痛みや痒みを感じにくいが、しばらくすると、咬まれた箇所が大きく特徴的なカサブタになる。病原体を持ったツツガムシに咬まれた場合、咬まれて1週間ぐらいいから、全身に紅斑が見られ、諸々の体調不良が現れる。ツツガムシ病も、場合によっては命に関わる疾患であるため注意が必要。

▼ スズメバチ・アシナガバチ等

刺すハチの中でもとくに体が大きく攻撃性も高い。針が太くて痛みが強だけでなく、毒によるアナフィラキシーを起こすと命に関わることもある。中でもオオスズメバチやキイロスズメバチの被害が大きい。

女王バチは単独で春に活動を開始し、巣を作り働きバチを育て始めるが、この時期の被害は滅多にない。初夏の頃から働きバチが成虫になって活動し始めるが、攻撃するのは巣を守るためなので、巣に近づかなければ襲われることはない。秋には翌年の女王を守り育てるため、非常に攻撃性が増すため要注意。

スズメバチの場合、巣に近づくと、働きバチたちが警戒して巣から出てきて、敵の周辺を飛びながらアゴをカチカチ鳴らすので、その威嚇音に気づいたら、ただちに巣から離れる必要がある。クマを最大の敵と認識していることから、黒い服を着て動いていると特に攻撃対象にされやすいと言われている。

キイロスズメバチは人家の軒下など雨の影響を受けにくい高い場所に営巣することが多いので、巣を見つけやすいが、オオスズメバチは自然豊かな環境の枯れ木のウロや地中に巣を作るので、巣の位置を把握するのが難しい。アシナガバチは、木々の枝など人の背丈前後の高さに巣を作ることが多いので、林などを歩いていると誤って巣にぶつかったり蹴ったりしてしまうことがある。先頭の人を巣に触れ、その人が通り過ぎたあとに2番目3番目を歩いている人が襲われるケースもよくある。

長袖長ズボンでも、肌にピッタリしたアームカバーやレギンスなどでは、毒針が布地の上から肌まで貫通してしまうので、多少ゆとりのある服装の方が、針が皮膚に届きにくい。

▼ マムシ

体は茶色っぽくクサリ状の模様がある。ヘビにしては短く太いずんぐりした体型で、頭が三角形に近い形をしていることも特徴である。

向こうから襲ってくることはないが、敵が近づいても逃げずにじっと潜んでいるタイプのため、気づかずに踏んでしまい、噛みつかれる事故がよく起こる。毒牙は細く繊細なため、長靴を履いていれば被害を受けにくい。

その他の注意

○虫探しの活動をするとき、道路に飛び出したり、高い所に上ってしまったたりすると、大変危険ですので、事故のないように注意しながら楽しみましょう。また、断りなく余所の方の庭、田んぼや畑、駐車場などの土地に入らないようにしましょう。空港など立ち入りが禁止された場所もありますので、気をつけてください。

○そして、もうひとつ、とても大切なお願いがあります。虫を捕まえてそれを放す場合、**なるべく日（時間）を置かず、必ず元の場所に戻してください。**

近年、外来種という言葉が広く知られるようになりました。**本来その場所にいなかった種を野生に放してしまうと、その地域の自然のバランスを崩してしまい、けして元には戻せなくなってしまいます。**

これは、**外国からの持ち込み**に限ったことではなく、**国内の他の地域からの持ち込みも、同様の問題**があります。例えば、チョウやクワガタなどを、「キレイだから、カッコいいから、身近で見られたら嬉しいから」と、よその地域から連れてきて放す人がいて、それが定着してしまった事例があります。

さらに、ホタルの放流は、昔いたホタルがいなくなってしまうと残念だからと、公的にも各地で行われた時期があります。同じ種ならいいだろうと離れた場所から捕ってくることも多かったようです。

しかし、例えば、ゲンジボタルは西日本と東日本で光り方が違うと研究で明らかになっています。現代では、同じ種であっても、遺伝子などのレベルによって地域ならではの特徴を備えてきており、それを人の手によって攪乱してしまうのは問題があると考えられるようになってきています。たとえ侵略性が高くないとしても、長期的に、あるいは細かく見れば、影響がないということはありません。

また、一度人の元で飼育した生き物を自然に戻すことは、自然へのさまざまなリスクがあります。その個体に自然の中で生きる力がもうなくなってしまうこと、人工的な飼育環境での病気や薬品の影響などを自然の中にもたらしてしまうかもしれないこと、などが挙げられます。かわいそうだから…と逃がすのは、それは、けして、その生物のためにも、自然のためにも、ならないと言えます。

捕まえた虫を放す場合は、必ず元の場所に戻してください。虫を飼う場合は、最後まで責任をもってお世話し、けして自然に戻さないでください。

希少種・外来種・普通種について

『虫を探そう!』では、小美玉市において珍しい種・見つけるのが難しいと思われる種を中心にリストアップしました。

珍しいということや、普通に見られるということは、どういう意味があるのでしょうか。ぜひその理由や背景を知っていただければと思います。

○希少種

生息数が少なく珍しい種は、希少種と呼ばれます。基本的には、外来種を除き、**もともとその土地に生息する在来種を指す**言葉です。

「**絶滅危惧種**」という言葉聞いたことがあると思います。言葉のとおり、希少種の中でも、絶滅が危惧されるほど生息数が減っている種のことで、「虫を探そう!」のターゲットリストにも、多くの絶滅危惧種が含まれています。

様々な要因から、在来種が希少になり、絶滅が危惧されるようになってきています。なかでも、生息環境の急激な変化が最大の要因と言われており、乱獲の問題や、外来種の問題もあります。これらの「絶滅危惧種」をリストアップしたものが**レッドリスト**、リストアップされた種をまとめた冊子は**レッドデータブック (RDB)** と言います。

レッドリストは、日本の場合、全国単位のもの自治体単位のものがあります。**全国的に**希少で絶滅のおそれのある種は、**環境省**でリスト化しており、この他、**各都道府県**でも地域ごとのリストを作成しています。市町村単位で出しているところもあります。

絶滅危惧種の指定では、保全状況が段階的に分類されています。こういったカテゴリー分類は、リスト作成機関ごとに多少基準の違いがありますが、おおむね、国際自然保護連合 (IUCN) の規定 (右側の表) に基づいています。

IUCN レッドデータカテゴリー

絶滅	絶滅	EX
	野生絶滅	EW
絶滅危惧	絶滅寸前	CR
	絶滅危惧	EN
	危急	VU
低リスク	準絶滅危惧	NT
	低危険	LC
その他	データ不足	DD
	未評価	NE

環境省・茨城県ともに、リストはネット上にも公開されており、図書館にも置かれています。茨城県版は、県庁 (3階/県行政情報センター) で購入することもできます。種名だけでなく、どのような理由でリストアップされているのかも解説されていますので、ぜひ、調べてみてください。

○外来種

外来種というのは、人の手による移入種のことを指します。

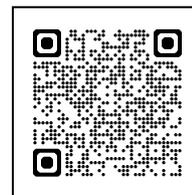
渡り鳥や、台風などにより風で運ばれてきた植物や昆虫など、こういった自然に飛来してきたケースは、本来その土地にいなかった種であっても、外来種とは称しません。

逆に、国内間での移入であっても、それが人為的な過程を経ているのであれば、外来種です。移入の経路としては、船や車などの乗り物、荷物などに付いて一緒に運ばれてきて、そこから広がったものや、食用、愛玩や観賞、害虫や害獣の駆除などさまざまな目的のために意図的に運ばれ、それが逃げたり放されたりして野生化・定着してしまったものもあります。

例えば、植物ならクローバーやハルジオン、動物ならコイやニホンヤモリなども外来種で、すでにたくさんの外来種が、現在の日本の自然の一部になってしまっています。

なぜ外来種が問題とされるのかというと、どの種も地域の本来の自然の生態系を脅かす（本来の自然を破壊してしまう・本来生息していた種を駆逐し絶滅させてしまう）可能性があるからです。著しく生態系を脅かす外来種は、「侵略的外来種」と称されます。これらの「侵略的外来種」の中でも特に被害が大きいものについては、被害を少しでも小さくして本来の自然環境を保全するため、「外来生物法」という法律によって、「特定外来生物」と指定され、生きたまま運んではいけない、飼育してはいけないなどの、様々な決まりが設けられています。

参考までに、右記二次元コードから、環境省による『日本の外来種対策』というホームページをご覧になってみていただければと思います。



「特定外来生物」にまでは指定されていなくても、悪影響が強く危惧される侵略的外来種は、環境省作成の「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」にピックアップされています。「特定外来生物」に指定するべきか、調査・研究や検証の対象ではあります。詳しくは、それぞれの言葉をネット検索してみてください。

○普通種

身近に普通に見られる種です。ただし、ずっと普通種でいてくれるとは限りません。